

泌尿器の common disease に みる非典型的画像所見

序 説

福倉 良彦* 陣崎 雅弘**

本特集は、「common diseaseにみる非典型的画像所見」シリーズの一環として、これまでに取り上げられてきた頭部、呼吸器、肝胆脾に続き、泌尿器領域に焦点を当てたものです。日常診療で頻繁に遭遇する泌尿器疾患の中には、他疾患との鑑別が困難となる非典型的な画像所見を呈する腫瘍性病変も存在します。本特集はこのような非典型像に着目し、画像診断の精度向上と臨床応用力の強化を目的として企画いたしました。

泌尿器領域には、腎臓、腎盂・尿管、膀胱、前立腺、副腎、精巣などの各臓器における腫瘍性病変、すなわち“common disease”が多数存在します。これらの疾患に対する画像診断は、診断および治療方針決定において、きわめて重要な役割を担います。しかしながら、こうした病変はしばしば教科書的な典型像から逸脱し、背景因子（加齢、合併症、既往歴など）や病理学的多様性により、非典型的な画像所見を呈することがあります。非典型像を示す場合には、腫瘍の組織型の違いによるバリエーションはもとより、炎症性病変や過形成といった非腫瘍性疾患との鑑別も必要となり、診断に難渋する場面が少なくありません。こうした症例においては、見間違いや見逃しのリスクも高

まります。しかしながら、従来の教科書や解説書では、このような非典型例が体系的にまとめられることは稀であり、日常診療への実践的な応用には限界があるのが現状です。さらに、腎腫瘍においては、2022年に改訂された『WHO腫瘍分類』により病理学的分類が複雑化し、それに伴い、画像診断の難易度も一層高くなっていると感じます。

このような背景のもと、本特集では、各腫瘍の典型例に加え、画像所見が他疾患を想起させる非典型例や、鑑別が困難な症例を幅広く取り上げました。各稿においては、鑑別すべき疾患の具体例、着目すべき画像所見、さらには、追加すべき有用な検査についても詳述していただいております。

最後になりましたが、ご多忙の中、本特集の趣旨にご賛同の上、ご執筆いただいた先生方に、心より感謝申し上げます。どの原稿も、豊富な症例提示と精緻な考察により、内容の充実した特集になったと確信しております。また、本特集が、初学者にとっては知識整理の手助けに、そして専門医にとっては診断力を一層高める実践的な教材として役立つことを願ってやみません。

* 川崎医科大学機能代謝画像診断学 ** 慶應義塾大学医学部放射線科学教室（診断）

* Fukukura Yoshihiko Department of Radiology, Kawasaki Medical School

** Jinzaki Masahiro Department of Radiology, Keio University School of Medicine